

駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 5 号

昭和61年3月31日 発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町
TEL. 07717-2-1181 (代)

啓 蟄 (けいちつ)

図書館長 武 田 創

24気の一つで太陽暦では3月6日前後の時季で、虫が地中からはい出して動き始める時節である。人でも長い陰鬱な冬からの開放感を味わい初めるのが此の時節に相当し、観光地ではぼつぼつ観光客がふえ始める。

さて本学の図書館での学生の入館者の増加(うごめき)は、虫や観光客の蠢きが啓蟄と相前後して盛んになるのとは趣を異にし、試験期の約10日前後が啓蟄に相当する。従って学年末試験や期末試験では夫々、虫の冬眠や夏眠の醒

めようとする頃に既に活発な活動が始まっているが、試験が終了すると冬眠・夏眠の状態に入り、図書館への入館者は殆どなくなる。

他方、虫や観光客の蠢きは図書館への入館者の減少の頃になると愈々活発となる。

一年間を通じてSexの可能なのは神が人だけに与えたもうた恵み(?)である。

図書館も一年を通じて活発に利用される事を期待してやまない。

メーヨ・クリニックでの思出

附属診療所長 間 島 進

1964年から1965年にかけて1年間、文部省の在外研究員としてアメリカ合衆国に留学した。このときの Mayo Clinic での経験が私の研究生活に大きな影響を与えた。日本を発ったのは1964年9月で、留学先はNIHで(国立衛生研究所)の一部門であるNCI(癌研究所)であった。NCIはワシントン郊外の Bethesda にあったので、近くには博物館・美術館や史跡も多く、研究所での胃の発癌実験の勉強の他に、土・日曜の休日にはこれらの所を訪ね、楽しい日々を過ごすことが出来た。10ヶ月のNCIでの滞在を終えて、留学の締め括りをすべく、Mayo Clinic を訪れたのは1985年7月であった。

Mayo Clinic はミネソタ州の一小都市

Rochester (人口3万) にあり、全世界から患者が集ってくるといわれていて、Mayo Clinic のために町が出来たような感がある。Mayo Clinic のすばらしさは、今まで多くの有名な医師・学者を排出していることである。Mayo Clinic を訪れてその機構を知るに及んで、その理由がわかる様な気がした。特に感心したのは Mayo Clinic の medical philosophy である。「医師・財団は患者に obligation を負わされている。医師・病院の報酬は法外のものであってはならない。Reasonable な報酬でなければならない。それ以上の利益はすべて社会に還元さるべきである」ということであった。実際に Mayo Clinic の医師は高い収入を得ていないが

満足して働いている。それは「十分な研究費と研究施設があたえられ、そのために優秀な人材が集まり、診療だけでなく研究を通して社会につくしている」という自覚によるものであった。

Mayo Clinic での楽しみの一つに、毎週水曜日の午後7時～9時に行なわれる Staff Meeting に出席することであった。この Meeting での講演はすべて Mayo Clinic Proceedings に掲載されている。この Proceedings の表紙に図の様な楕の絵が描かれている。楕は3分されて夫々に Education・Research・Practice の文字が書かれてい、この3つがバランスよく発展しなければならないことが表されている。大学を卒業して外科教室に入ってから常に考えてき、留学中も常に心にあったことは、大学の臨床教室は如何にあるべきかという事であった。この Staff meeting に出

Mayo Clinic Proceedings



Effects of Urea Loading in Patients With Far-Advanced Renal Failure
William J. Johnson, Wolfgang W. Hagg, Richard D. Wagner,
Robert P. Diaperi, and John W. Renner
Anaerobic Bacteria in the Urinary Tract
Joseph W. Igusa, Francisco F. Ichik, William J. Renner

席し、この絵をみるに及んで、答がえられたような気がした。医学の知識をあたえるだけなら医専の教育で十分であろう。大学教育というのは医学の知識の外に、Research Spirit を植つけることで、かくして独創的な人材が育ち、医学の発展につながり、良い治療ができるようになると思う。帰国後間もなく京都市立医大に移ったが、この3者のバランスをとるように心掛けてき、今後もこの方針を維持したいと思っている。

Mayo Clinic における今一つの楽しみは、休日に町外にある Mayo 公園に行つて Mayo 兄弟の銅像の下で、これまでの生活をふりかえり、将来を展望することであった。Mayo 兄弟の銅像を見るたびに頭にかんてくるのは “Please, tell me your dream. I will tell you my experiences.” という Mayo 兄弟の言葉であった。独創力にとんだ学生を育てなければならない大学の先生にふさわしい姿勢のように思う。帰国後は学生にこの姿勢で接するようにつとめている。

以上の様に、Mayo Clinic での滞在期間は僅か2ヶ月であったが極めて充実した期間であり、大学における研究生活に大きな影響を与えてくれた。この意味で Mayo Clinic での滞在は、私の一生において極めて思出の深い期間であった。

追 憶

自然科学教室 初 田 勇 一

古稀を過ぎて、過ぎ去った長い年月の間の研究をふりかえてみると、研究が順調にいった頃のことや、苦勞した頃のことや、次々と思ひ出されてくる。私が東京大学農学部農芸化学科を卒業後、藪田研究室に入ったのは40数年前のことである。故藪田貞治郎先生は、稲の馬鹿苗病菌のつくる植物ホルモンであるジベレリンの研究で文化勲章を受賞された。当時、この研究室では糸状菌の代謝産物（かびのつくる物質）の研究が行なわれていた。

昭和15年の秋、東京の品川に菌類の保存と研

究を行なう財団法人長尾研究所が設立され、私は農学部とかけもちで、ここの研究員になった。ここで植物病原菌、エレモテシウム・アシビエのつくる色素の研究をはじめた。この菌は、コンゴで、棉の蒴果から分離された分類学的にも珍しい菌である。この菌のつくる黄色色素を単離して、詳細な研究を行ない、これがリボフラビン（ビタミンB₂）であることを証明した。これは昭和18年のことである。その後、この発酵はフラビン発酵とよばれ、この菌を用いてビタミンB₂の工業的生産が行なわれた。

第二次世界大戦末期の昭和19年1月27日、「ペニシリンでイギリス首相チャーチルの肺炎がなおった」というブエノスアイレスからの特派員電が朝日新聞に掲載された。これを契機として、2月1日に、陸軍軍医学校にペニシリン委員会（後に碧素委員会と改名）が設立され、東京近郊の大学の研究室や研究所から専門の研究者が参加して、共同研究が行なわれた。私も藪田研究室からその一員として加わり研究に従事した。東京は年末から空襲が激しくなり、年がかわってからは度々の爆撃で、次第に焼野ケ原となって、多くの人々が死んでいった。このような激しい空襲下の極限状況におかれながら、極度の食糧難のもとで、研究が行なわれ、度々委員会が開かれて、研究結果が報告された。多くの研究員の協力によって、ペニシリンをつくる有効な青かびの菌株がみつかり、これを培養してペニシリンがつくられ、臨床実験に用いられた。8月15日、敗戦とともに陸軍軍医学校は解体し、碧素委員会も消滅した。この委員会のペニシリンの研究が日本の抗生物質の研究の発端である。

昭和53年に、角田房子著「碧素・日本ペニシリン物語」（新潮社）が出版された。この本は著者が戦後30年余りたってから、碧素委員会でペニシリンの研究にたずさわった人々から話を聞いて書いたものであるが、当時の様子が詳しくのべられている。

終戦後、長尾研究所で、麴菌の一種、アスペ

ルギルス・ベルシコロールの色素の研究をはじめた。この菌は分布の広い菌で、種々の色調の菌株がある。この菌株から新色素を単離して、ステリグマトシスチンおよびベルシコローリンと名づけて、その化学構造を研究した。

昭和27年の秋に、鳥取大学に赴任したが、その後もこの研究を継続し、この菌から10種の新色素を単離して、これらの化学構造を決定した。さらに、X線構造解析によって、これらの立体構造も明らかにした。ステリグマトシスチンをはじめ、これらの色素の多くは、ビス・ジヒドロフラン環という特異な部分構造をもっており、天然物としては新しいもので、ビスフラノイドと総称されている。また、ステリグマトシスチンは強烈な発がん物質であることが認められ、マイコトキシン（かび毒）として関心がもたれている。アスペルギルス・ベルシコロールは米、麦などの主要穀物からしばしば検出されるので十分な注意が肝要である。

なお、鳥取大学在職の26年余りの間に、他の種々の糸状菌の代謝産物についても研究し、30数種の新物質を単離して、これらの化学構造を決定した。長い年月の間には、研究論文を投稿する矢先に、外国で同じ研究が発表され、それまでの苦労が無駄になったことも少なくない。その度に研究の厳しさを痛感した。

これらの研究で、日本農芸化学会から昭和31年に農芸化学賞を、昭和48年に鈴木賞を受賞した。

図書盗難防止用通路と肥満学生

臨床医学教室 吉田俊秀

私は、5年前、肥満に興味を持ち、米国カリフォルニア大学（UCLA）内分泌内科へ留学した。ここで最初に強く印象に残った事は、世界最大の数10万冊の蔵書を有するUCLAの図書館へ、Bray教授に案内されて行った時の事である。

入口のすぐ横にある図書館の出入口には、幅50cmの図書盗難防止用通路があり、盗難防止用

磁気テープの取り付けられた図書を、絶対無断で持ち出せないようになっていた。

しばらく見ていると、日本での肥満者とは、ケタはずれに違う異常肥満（300kg以上と思われる）の金髪の学生が出口に来たのである。あんなに太ければ通れないなあと思っていたら、図書館員に何か話し、ボディチェックの後、その盗難防止用通路の外側を通り出ていった。

しかし、出ていくまぎわに、この図書館員に、早く瘦せて、この通路を通れる様に世間並になれよと言われていた。私はこの光景を見ながら、この時は、アメリカ人の肥満はすごいなあと思っただけであったが、Bray 教授は、付けた。「アメリカ社会では、肥えすぎている事は、自分自身をコントロールする事ができなるとみなされ、当然、部下をもコントロールすることができないだろうとされる。それゆえ、肥満者には、十分な就職先もない。この通路の50 cm幅というのは、UCLA 当局の肥満学生に対する暖かい思いやりなのだよ」と。

その後、この大学にて行った肥満の研究に対する思い出は、多々あるが、最初に受けたこの狭い通路での印象と、Bray 教授のこの言葉は今でもはっきり私の脳裏に残っている。

日本では、この様な異常肥満者は少ないが、肥満も自分の意志をコントロールする事ができない結果であるという観点からすれば、入学後、優秀な学生がいる反面、勉学の方へ自分を全くコントロールできず、遊びほうけ、それでも卒業させてもらえると、甘い考えを持っている学生が多数いる事は、驚きである。甘いものを食べすぎて、社会から落ちこぼれる肥満のアメリカ人と、甘い考えを持ちつづけ、落ちこぼれる日本の大学生、共に世の中が平和すぎる為の、

社会に対する甘えの結果であるのだろうか。考えさせられる問題である。

ところで、本学の図書館にもかなり豊富な蔵書がある。しかし、驚くべき事に、学生の自由に使用できる開架図書は、非常に限られ実に貧弱である。又、閉架図書が借りられる事を知らない者も多いし、たとえ知っていても手続きがかなり面倒の様で、借りにくいのが実状であろう。これは、悲しいかな、全図書を学生に開放すると、図書が早く傷むとか、紛失する為と説明されている様である。私が学生に内科学の発表テーマを与えた時、「この大学には、自由に借りられる十分な本が無いので、これ以上勉強できません。」と言う答が返ってきた。本人の意欲が足りない事もあるが、UCLA の図書館とはいらないまでも、かなり多数の本があるのに、何の為にあるのだろうかと、寂しい気持ちにおそわれた。

ここでもう一度、両者が考え直し、歩み寄る事は不可能だろうか。もし出来るなら、全図書に盗難防止用磁気テープを張りつけ、盗難防止用通路を取り付けても、もう少し本来の大学の基本姿勢にもどり、学生の能力を伸ばし、勉学の意欲を向上させる為に、学生に対する大学当局のいっそうの暖かい思いやりを期待したい。

華やかな科学

東洋医学教室 矢野 忠

日航ジャンボが墜落した。あまりにも悲惨な事故であっただけに、読者諸子にはまだ記憶に新しいところであろう。原因は、修理ミスによる人因的なものであった。誰もがまったく予想だにしない原因であった。設計上は、いかなる損傷もチェックできるはずであった。たとえばある部分が故障しても制御できるフェイル・セーフ・システムという新しい安全概念の基に設計された飛行機であったが。

ようやく悪夢のような日航事故を忘れかけようとした時に、テレビの中でスペースシャトル

が爆発した。まるで一尾の白龍が蒼穹とした天空を飛翔するごとく、かろやかに舞上がったシャトルが一瞬間絶えるかのようにならなくなった。テレビの中の一コマの出来事であった。その瞬間を誰が信じたであろう。あれはテレビ映画の作り事であってほしいと願ったはずである。

日航ジャンボもスペースシャトルも現代科学の粋を結集して制作された人類の創造物であった。いわば人類の英知であり、誇りであり、神への微笑みであった。しかし、単純なミスも発見できず尊い人命は失われてしまった。あまり

にもあっけなく！

この事故は、人間の能力の限界を意味するものなのか、あるいは現代科学への過信に対する自然の警告とみるべきなのか、何れにしても「科学と人間と自然」の歪んだ関係を象徴する事故であった。

科学は、人間と自然の戦いの中から発達して来たものである。寒さを凌ぐために火を起こした。食を得るためにマンモスと戦った。収穫を豊かにするために星空を読んだ。新しい土地を求めて海に出た。自然に対する一つ一つの戦いが確実に人間の生活を豊かにしてきた。そして、人間は生活が豊かになればなるほど多くの戦いを試みた。これらの戦いは決して自然に敵対するものではなく、自然を理解するための戦いであった。様々な戦いを通して得た経験はやがて技術となり、科学として発達してきた。近世の人々は自然との限りない交わりを通して自然の素晴らしい創造力に感嘆し偉大さに驚嘆した。特に生命の誕生と終焉の見事なドラマに深い愛着を感じ、感謝の祈りを捧げたであろう。

このようにして科学は、本来人間と自然の限りない調和を追及するものであり、決して自然の摂理に反するものであってはならない。科学は、あくまで人間と自然の関係を豊かにするものでなければならない。しかし、科学が自然の事象の背後にある法則を暴きだす力を得るようになったその時から自然との睦しい交わりを止め、むしろ自然に刃向かい、自然を支配することを望むようになった。それが現代科学である。

現代科学は、同じ遺伝子を持つヤギをいとも

簡単に作りだす。絹を作る大腸菌といった新生物を創造したりする。また、月を地球の衛生都市にしようとしたりする。このように現代科学は、自然に存在しない新生物を創造したり、自然の秩序を変えようとする新たな力を持つようになった。そして、現代科学が自然に対し僅かに勝利のかちどきをあげたかに見えた時、日航ジャンボは御巢鷹山に激突し、520名の命が散華した。また、相前後してスペースシャトルも宇宙への限りない夢を載せて空に散った。現代の神の手として燦然として輝き続けようとした科学が、自然の前にかくも無力な姿をさらけだそうとは、誰ひとりとして予想したであろうか。

このような不幸な出来事は、氷山の一角であろう。アフリカの人々の涙は、決して自然の気まぐれではない。自然の生態系の破壊が原因と言われている。人間の生活を豊かにし、自然との調和を計るべき科学が自然の力をあなどったり、自然の秩序を犯し始めた時から、科学に於ける恩恵と恐怖が同居するようになった。ひとひらの花卉だに現代科学は創造しえたであろうか。それを科学の力によって創造した物が自然のそれよりも優れていると錯覚してしまった時、大惨事が起こった。人類の驕りである。

今、私たちは、科学によって得た豊かさと引き換えに失ったものの大切さを省みなければならない。自然を無視した科学の便利さは、確実に人間性を虫ばみ、自然を怒らせる。科学至上主義に陥ってしまった現代において、もう一度自然の優しさ、恐さに目を向け、自然のメッセージに耳を傾ける必要があるのではなからうか。

読 書 雑 感

自然科学教室 小林 和子

子供のころ、本を読みながら、さまざまな場面を空想し、わくわくするような快感を感じたことを覚えている。ある一定期間、本を読まない、というより、本を読もうという落ちついた気分になるような時間がないとき、(たいてい、

試験を間近に控えているとか、レポートの提出期限が迫っているとかいう時だが) 禁断症状を示す。がまんできなくなると、本屋さんへ駆けこみ、一度に何冊も買いこんで夢中で読むということもよくあった。

最近は、さすがに当時ほどの興奮は感じなくなったが、本を読むことは好きである。ただし、専門分野に関する本については、読むというより、見る、集める、という感じである。専門雑誌に投稿された膨大な文献については、その文献の要旨をおよそ理解し、各項目ごとにリストアップして、コピーし、ファイルにして集めておき、役に立ちそうな時とり出して使うという情報収集であるから、読書というイメージからは、かなり離れている。限られた狭い分野の文献については原文を読むことも努力しだいで可能だが、最近のように、各々の分野の枠がはっきりしなくなり、境界領域が増大してくると、オリジナルの論文をそのまま読んですぐ理解することが難しくなってくる。したがって、境界分野のさまざまな情報について解説してある二次情報雑誌にたよることになり、質の高い二次情報誌の必要性が増しているのかもしれない。

化学という分野においては、学問的に、無機化学、有機化学、物理化学、生物化学、分析化学と大きく分かれているが、その他にも工業化学、農芸化学などのように産業の違いで分けている場合もある。各々の分野でさらに細分化が進み、同じ化学出身でも、まるで話が通じないということもあり得る。それでは困るというわけで、各々の分野で集積された知識を再構築しようとしているのだろう。今は、バイオばやり

で、バイオテクノロジーは時代の最先端分野だが、化学用語も次々と新しくつくられている。バイオテクノロジーとエレクトロニクスとの融合ということで、バイオエレクトロニクスという用語すらできているのである。自然界に存在する生物や、生命メカニズムを学び、模倣し利用しようという方向に進んでいる。感覚器官における情報処理の解明が進めば、人工感覚、感覚代行の開発が促され、バイオアクチュエータや各種臓器代行もできるようになるかもしれない。

夢は限りなく広がるわけだが、あまりに欲ばって頭の中におしこめようとしても、頭脳にも許容能力があって、ある限度をこえると、働かなくなり、情緒障害をおこすらしい。こんな時、私は気分転換に小説を読む。S.F.や、推理小説もよいが、幻想的で詩情豊かで、しかも美しい文体の本を読むと、人間らしい文化というものに浸った気分になる。ユルスナルの「東方綺譚」は、非常に印象に残っている。訳者の力が大きいのだろうが、美しい格調のある文体である。と、いかにも文学に素養のありそうなことをいっているが、実は、この本は、新聞の書評という二次情報で知り、求めたものなのだ。情報収集を目的とする読書の習性が、出てしまうのかもしれない。

西洋図書館小史 (その五)

附属図書館 八木克彦

Ⅲ 近世篇

17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパは啓蒙時代、あるいは文芸擁護の時代と呼ばれ、イギリスのロック、ヒューム、ホブズ等に端を発した啓蒙思想は、レッシング、ヘルダー等を経て、フランスではボルテール、モンテスキュー等の優れた思想家を輩出し、さらには、ディトロ、ダランベールに代表される百科全書派を生み出した。

これによって民衆は中世を支配したキリスト

教への批判→信仰の自由、合理主義、進歩への概念に目醒め、各国に芽ばえつつあった市民精神の具体化への原理と活力を獲得するに至ったのです。

自然現象、社会現象の集中的研究は、必然的に知識の組織化・体系化を要求します。

17世紀には各地に学会が作られました。すなわち、ローマ科学会 (Academia dei)が1600年に、ロンドンの王立学士院 (Royal Society) が1662年に、パリ科学アカデミー (Académie

des Science)が1666年に設立されております。

また、学術雑誌が初めて刊行されたのもこの頃のことです。1665年英国王立学士院は「哲学会報」(Philosophical Transaction)を出版し、フランスでは「博学雑誌」(Journal des Sçavans)が同年に、ドイツでは、「博識雑誌」(Acta eruditorum)が1682年に刊行されて、科学者間相互のコミュニケーション、文芸思想の普及に貢献しました。

こうした雰囲気の中だけでは当然のことながら、各地に多数の図書館が新設され、また、旧来の大図書館が新しい発展の期を迎えます。

イギリス、フランス、イタリアなどでは、自ら愛書家であり文芸学問の擁護者を自認する王侯・貴族等の図書館が発展してまいります。

オックスフォードのボードリー図書館、パリのマザラン図書館、フランス王室図書館などが代表的なものです。

このフランス王室図書館はルイ十一世の治世(1461~80)に、いくらかの写本と印刷本を押収して始められたものとされていますが、ともに愛書家であったシャルル八世、ルイ十二世の時代に積極的にコレクションを増やし、フランソワ一世の時には1537年の法令で納本制度を施行しております。1666年熱烈な図書館信奉者であった宰相コルベールは、建物を移転拡張し、外国駐在の大使達に図書収集の使命を課したり、写本など特別なコレクションの購入をはかり、また彼自身への献本を寄贈するなどして、旧来の蔵書を約4倍に増やしました。

1789年に始った大革命では、修道院や教会、貴族の蔵書がすべて押収され、パリやその他の地方には押収図書を保管する大きな倉庫(dépôts littéraires)が設けられ、山積された図書は、パリで160万冊、地方では600万冊にも達したと報告されていますが、国民図書館(Bibliothèque Nationale)と改称されたこの図書館は、デポーから30万冊を掻き集めて自館の蔵書に加えました。

現在この館は、アルスナル図書館、コンセルヴァトワール図書館、オペラ図書館などととも国立図書館グループを形成し、世界有数の図書館として活動しております。

マザラン図書館(Bibliothèque Mazarine)はマザラン枢機卿の創設によるものです。マザ

ラン(Jules Mazarin 1602~61)はリシュリューについてブルボン王朝の絶対王権確立に貢献した大宰相ですが、彼の邸宅に設けられた図書館は、質量ともに王室図書館に匹敵するものでした。

マザランの図書館が大きく成長したのは、館員ノーデ(Gabriel Naudé)の識見と努力に負うところが多いとされています。

ノーデの著作「図書館建設に関する意見書」(Advis pour dresser une Bibliothèque 1627年刊)は図書館学上今日でも高く評価されております。この図書館が「学ばんとするすべての人々のために」公開されたのは1647年のことでした。マザランが失脚し、一時国外に亡命したとき、この蔵書は政敵によって売立てに出されましたが、ノーデは医学関係のコレクションを購入保管し、1653年パリに復帰したマザラン卿にこれを遺贈しました。1666年当時マザランは約45,000冊を収集しておりましたが、彼はこれをキャトル・ナシオン(現在のフランス学士院)に寄贈し、また、ルイ十四世時代には、この図書館の写本類は宰相コルベールによって王室図書館に移されました。

現在のマザラン図書館には50万冊の図書と、1,800のインキュナブラがあります。当時のパリには上記の二大図書館のほか、サン・ジェルマン・デ・プレ図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館、サン・ヴィクトール図書館などがありました。

フランスの図書館は革命によって、今迄特権階級の私有物であったものが、国民全体の財産として国有化され、人々に広く開放されました。また、膨大な押収図書は何年もかけて仕分けられ、政治・行政・文学・科学関係それぞれの専門図書館新設の基盤となり、地方では革命時の規則によって、各市は市民図書館を作るよう義務づけられたのです。(つづく)



近着東洋医学系図書一覽（和書）（昭和60年1月～12月収蔵分）

産婦人科医のための東洋医学 鈴木雅洲編	南江堂	昭58	中医臨床大系 第Ⅱ期 6巻 趙紹琴 他編 張鳳山 他訳 雄渾社	昭59
漢方醫薬学・付傷寒論・金匱要略 久保道徳他	広川書店	昭59	漢方基礎理論 織田啓成編 エンタプライズ	昭60
中国日本薬用植物・生薬 木村重光	広川書店	昭58	耳針法 - P.ノジエ理論と臨床 - Bourdiol, R.J.原著 黒須幸男監訳 エンタプライズ	昭60
鍼灸治療の真髄 - 経絡治療50年 - 岡部素道	績文堂	昭58	現代中国針灸配穴事典 東医針灸研究会 編著 燎原書店	昭60
鍼灸の科学 一理論篇一 芹澤勝助	医歯薬出版	昭59	鍼灸術秘伝書 沢田治津夫 神宮館	昭60
漢方概論 経穴編 全国東洋医学学校協会編	医歯薬出版	昭59	経絡反応帯療法 山西医学院 編著 東洋学術出版	昭60
軟部組織損傷の治療法 泻天有編末	踏	昭59	現代の漢方治療 大塚恭男他編 東洋学術出版	昭60
自律神経失調症と漢方 久保道徳他	三一書房	昭60	鍼灸術の門 柳谷素靈原著 石山針灸医学社	昭55
経絡 - 臓器機能測定について - 本山 博	宗教心理研究所	昭49	勿語薬室 方函・口訣釈義 長谷川弥人 創元社	昭60
東洋医学を学ぶ人のために 高木健太郎他監	医学書院	昭59	東洋医学の謎を解く 川村昇山 現代書林	昭59
黄帝内経概論 龍伯堅	東洋学術出版	昭60	東洋医学への警告 鈴木章平 暁書房	昭58
吸玉療法 王鳳儀他	東洋学術出版	昭60	定本経穴図鑑 芹澤勝助 主婦の友社	昭60
脈論口訣 新編増補 全五巻 曲直瀬道三	経絡治療学会	昭57	図説東洋医学 経穴編 木下晴郎・代田文彦 学習研究社	昭60
スモンに関する東洋医学の基礎的・臨床的研究 業績報告論文集 昭和58年度版	新東洋医学 総合研究所	昭60	漢方故事千一夜 磯 公昭 東京書籍	昭59
漢方問答 - 東洋医学の世界 - 荒木正胤	柏樹社	昭60	証と方剤学体系 玉城博任 燎原	昭59
続漢方問答 - 食養生の思想 - 荒木正胤	柏樹社	昭60	遥かなり鍼灸の道 早崎 芳 早崎 芳	昭60
新しい鍼灸臨床入門 和田清吉編著	和田臨床研究所	昭52	食養論 - 漢方からみた食養論 - 聖光園細野診療所 聖光園細野診療所	昭59
不思議の世界・鍼 小川晴通	エンタプライズ	昭60	病と漢方 - 健やかに生きるために - 聖光園細野診療所 聖光園細野診療所	昭55
あん摩・マッサージ・指圧師・はり師・きゆう師・柔 道整備師等の関係法規 第3版 厚生省監	医歯薬出版	昭60	図録 蘭学事始 杉本つとむ編 早稲田大学出版部	昭60
近世漢方治験選集 1～5 安井廣迪編集解説	名著出版	昭60	鍼灸診断学 黄志良編著 光和写真印刷	昭59
昭和鍼灸の歲月 - 経絡治療への道 - 上池 栄	績文堂	昭60	鍼灸学 - 経絡局所診療の実際 - 岡田 勝 医歯薬出版	昭57
私の鍼灸治療学 米山博久	医道の日本社	昭60	東洋医学 気の流れの測定・診断と治療 本山 博 宗教心理出版	昭60
経絡五行理論 漢方方剤鑑別早見表 升水達郎他	第一書房	昭60	生命波磁気無痛療法 内海康満 エンタプライズ	昭60
良導絡治療基礎講座 日本鍼灸良導絡医学会 日本鍼灸良導絡医学会			電気針療法 - 電気刺激法のすべて - 清水完治編著 エンタプライズ	昭60
開業鍼灸師のための診察法と治療法 I 出端昭男	医道の日本社	昭60	石坂流鍼術の世界 町田栄治編著 三一書房	昭60
全訳精解 大同類聚方 上・下 榎佐知子	平凡社	昭60	整骨・整形外科典籍大系 1～13 蒲原 宏監修 オリエント出版	昭58～59

あとがき

われわれの図書館も開学以来順調に成長をつづけ、現在27,500冊の蔵書と、約170種類の雑誌をもつに至っております。
 学生諸君の利用も年々増加し、本年度の貸出冊数は前年度比4割近く増えています。開架図書は少いかも知れませんが、書庫にはよい本が沢山あります。面倒がらずに備えつけのカードで検索して、閉架の図書もどしどし利用して下さい。
 おわりに、ご寄稿いただいた諸先生に厚く御礼申し上げます。 (K. Y.)